



戦争体験者が語る 戦争のこと

区では、「新宿区平和都市宣言」の理念を広く区民に伝えるためにさまざまな啓発事業を行っています。「平和講演会・映画会」や「すいとんの会」では、戦争を経験した方々が講師となって、自分の体験を語り続けてきました。その貴重なスピーチを本章でまとめて紹介します。戦争のつらさや悲しみ、そして平和を願う強い思いが、一つ一つの言葉に込められています。



消えない記憶「また、あした遊ぼうね。」

空襲



二瓶 治代さん

国立市青柳在住
終戦時：9歳

私は、総武線の亀戸^{かめいど}という駅のすぐそばに家族5人で住んでおりました。両親、中学生の兄、私、5歳になる妹の5人です。

3月9日は空襲がありませんでした。この日は、山形県に疎開していた6年生のお兄さんやお姉さんたちが卒業式で戻ってきており、夕方まで家のそばで遊んでいました。母親が「ご飯だよ〜。」って言うので、「また、あした遊ぼうね。」と言って、それぞれの家に帰りました。

その夜の出来事です。粗末な夕食を済ませ、大体8時くらいに床に就きました。すると10時くらいに「警戒警報^{けいかいけいほう}」が鳴ったんです。空襲が来そうだという連続のサイレンです。家にいた父が外を見に行き、「大丈夫そうだから、寝ていいよ。」と言ったので床にもぐりこんだことを覚えています。

しばらくすると、父が外から飛び込んできて、「今日はいつもと違うから起きろ」と言ったので私は飛び起きました。防空頭巾をかぶり、小さなリュックを背負い外に出ました。亀戸^{かめいど}の辺りはまだ暗かったのですが、砂町^{すなまち}の辺りの空は真っ赤でした。焼夷弾^{しょういだん}が、ザッザッザッザッ、まるで雨みたいに降り注いでいました。あれは何だと思ひながら、地面を掘って作った10人くらいが入れる防空壕^{ぼうくうごう}に入りました。ここには既にお隣の家族が5、

6人入っていて、我が家は母と妹と私の3人だけ入れてもらったんです。父は、防空壕^{ぼうくうごう}の外で周りを見ていました。中学生の兄は、「勤労働員^{きんろうどういん}」というのがあり、動員先に行ったのか、いなくなっていました。

壕^{ごう}の中に入っていると、周りの様子が聞こえてきます。お母さんが子どもを呼ぶ声、子どもが「お母ちゃん、お母ちゃん。」って泣き叫ぶ声だとか。それからパシーン、パシーンって何かが炸裂^{さくれつ}するような音が壕^{ごう}の中に響き、私は怖くて耳を塞いで、硬くなっていました。

すると、外を見張っていた父が、「皆、防空壕^{ぼうくうごう}から出る!そこに入っていると蒸し焼きになるぞっ!」って言ったんです。その時に、先に壕^{ごう}に入っていたお隣のおばさんが「あんた外行くと焼け死んじゃうよ。だからここにいな。」と言って、私の服の裾を引っ張って止めたんです。だけど私は、両親が出ると言うので、おばさんの手を振り切って外に出ました。そうしたらもう、まちの様子は防空壕^{ぼうくうごう}に入った時とは全く違いました。空も、周りも、地面も一面、ゴーゴーと炎に包まれているのです。真横からは火の粉が吹き付けてきます。家が燃えますから、畳とか、柱とか、障子とか、お布団とか、そういうものが火の塊になって飛んで来て、それが逃げる人たちに容赦なく当たるんです。だから、人は、燃えながら走っていました。子どもたちも燃えていました。お母さんに手を引かれて、走っていました。私も同じようにして走って逃げました。

家の前の京葉道路^{けいよう}（当時は千葉街道）を渡り、総武線の土手に一時避難しました。そして、そこで周りが燃えていく様子を見ていたんです。その中で、消防士が一生懸命燃え盛る炎に水をかけていました。しかし、消えないどころか、消防服に火がつき、ホースを持ったまま焼かれてその場に倒れていきました。この時代、消防士は自分の持

ち場を離れてはいけないという命令があったと言われています。逃げる事が許されなかったのです。そして、生きたまま焼かれていました。

また、このまちには荷物を運ぶ馬がたくさんいたのですが、その馬たちが暴走し、めちゃくちゃに走っていました。馬の死体もたくさん見ました。でも、そういう馬の中で、私がとっても印象に残っている馬が一頭います。その馬は、^{けいよう}京葉道路を^{きん}錦糸町^{しちやう}の方からトコトコ歩いて来たんです。「馬方さん」と言う飼い主さんがついていて、荷車に荷物を積んでいました。その馬はどうしたわけか、私が立っている土手の真下辺りで、動けなくなってしまい、4本の足をピンと突っ張らかして、立ちすくんでしまいました。そうしたら、馬の荷物に火がつき勢いよく燃え上がったんです。その火は、馬の尻尾から馬全体に燃え移りました。でも馬は、暴れもしないで、ジーンと立って焼かれていきました。そうしたら、その馬の火が飼い主のおじさんに燃え移ったのです。でも、飼い主さんは馬を捨てて逃げませんでした。馬の顔のところできっかりと手綱を持ち、一緒に焼かれていきました。私は、そういう姿を土手の上から見ていても、怖いとか、熱いとか、苦しいとか、そういう人間らしい気持ちを全く覚えません。ただ、もう、固まって見ていました。

そのうち、私たちがいる土手にも火が燃え移ってきたので、父と手をつないで^{かめいど}亀戸の駅の方に向かいました。その途中で、私の防空頭巾に火がつき、父が「頭巾を取れ！」と言うので、私は父から手を離して、^{あご}顎で縛ったひもを解こうとしたのです。その時に、ものすごい火の風が吹いて来て、私一人だけドーンと飛ばされてしまいました。そこで私は両親や妹と離れ離れになってしまいました。

一人で真っ赤な炎の中をグルグル回っていたような気がします。その時に、いきなり真っ暗な場所に出ました。そんなに広くない小さな場所ですけども、そこだけ暗くて火が無いのです。目の前

を見ると、大きな鉄筋の建物があり、その少し^{くぼ}窪んだ陰のような所で、人が一人だけ立ったまま燃えていました。身体から火を放っていました。思わず私は、「消してあげなきゃ！」って思ったんです。

その頃は、学校や親から、火を見たら消せって言われていたんで、そんな気持ちになったようです。何かで火を払いのけてあげようと思いましたが、防空頭巾も背負っていたはずのリュックも無いのです。思わず私は、自分の両手を出し、手で火を払いのけようと思いました。すると、その燃えている人が、私に向かって左手を出しました。何のためだったんでしょう。来るなという合図か、助けてという合図か、わからないのですが左手を出した。そうしたら、この左手から炎がパァーッと上がったんです。その炎は、何か緑色のような、青っぽい炎が風に揺れて、振り袖が揺れるみたいにきれいに見えたのです。私は、吸い付かれるようにその燃えている人に更に近付きました。すると、後ろから「あんた、そんなところに行くと死んじゃうよ。」と女の人の声がしました。それで、そこから離れたんじゃないかと思います。

今度は何かにドスッとぶつかりました。それがものすごく熱かったんです。熱さを感じたのはそれが初めてでした。熱いと思った途端に、ハッと我に返り、父も母も妹もないことに気が付きました。その時に、私の右腕をいきなりつかんだ人がいました。私を引っ張っていくのです。私は、「お父さんなの？お父さんなの？」って叫びました。でも、^{ばくふう}爆風で返事が聞こえません。夢中で叫びましたが、とうとう返事は聞こえませんでした。

そのうちに私は気を失い、道端に倒れてしまいました。そうしたら、私を引っ張った人が、動かなくなった私を自分の懐に抱えるようにして、道端に伏せたそうです。すると、同じように逃げていた人がたくさん近くに来るんです。人は皆怖いから、誰かがいたり、何か物陰があると、寄り添うようにして集まってくるのです。私の上にも

何人かわかりませんが大勢の人が集まってきました。私は一番下敷きになってしまいました。ほとんど気を失っているんですが、フッと気が付くと声が聞こえてくるんです。とにかく熱いし、苦しいし、重たいんですが、「俺たちは日本人だ。俺たちは日本人だ。」って。「死んでたまるか。大和魂がある。眠るな。」という声が朦朧とした中で聞こえてくるんです。私はまた意識が遠くなり、そしてまた気が付くと、「眠るな。生きるんだ。生きるんだ。」「死んでたまるか日本人。」とかね、そんなことが聞こえてくるのです。

人の下敷きになって、この炎の中でどのくらいの時間が経ったのかわかりませんが、朝の5時頃に火は自然に鎮火しました。何も燃えるものが無くなって。それから私は、上に積み重なった人の一番下から引きずり出されました。引きずり出された時に、私を炎の中で見つけて助けてくれた人、一晩中声を掛け続けてくれたのが父だったとわかりました。「ああ、お父さん！」と言う間もなく、父は、「ここを動くな！」と言ったかと思うと、まだ火が燃え残っているまちのどこかに行ってしまう。動くなと言われたので、そこにジッと立っていました。

辺り一面、なにも無いんです。ただ、白濁色の煙のような、霞のようなものが、フワフワ浮いているだけでした。動くものも無いし、声も音もありません。「ここはどこだろう。」と思った記憶があります。フッと、足下を見ると、私が今まで下敷きとなっていた所です。私の上に、重なり合っていた人たちは、真っ黒な炭みたいになっていました。私はそうやって死んでいった人の下敷きになり、守られるようにして助けていただきました。人間がこんなに黒くなるものかって、今でも不思議なくらいです。思わず自分で、「こんなになっちゃった。」って呟いたのを覚えています。

そこに、ジッと立っていたら、霞の中から人影

がやって来て、それが父と母と妹でした。父も、母も、やけどで顔がむくれて大きくなっていて、誰だかわからないくらいでした。5歳になる妹が、「足が痛い。足が痛い。」って言っていました。妹は大きな火傷をしていたんですけど、その時は気が付かなかったのです。

今度は、目の見える私が、両親と妹の手を引きながら、焼け跡を歩いて自分の家のあった方に、兄を探しながら歩きました。靴はどこかへいってしまい、裸足だと地面が熱いので、爪先立ちして歩きました。歩いている途中に、亡くなった人の靴でしょうか、片方だけ転がっていたので、その片方の靴を履いた記憶があります。

その時のまちの姿なんですけど、もう、ごみくずか薪のくずのように、道いっぱい死体がゴロゴロ、足の踏み場もないくらい散らばっていました。皆真っ黒になって。その中に、多分お母さんではないかと思えますけれど、子どもを胸に抱いて、うつ伏せで倒れている姿がたくさんあるんです。小さな赤ちゃんを抱いたまま仰向けに倒れている姿もあります。大きい死体のそばには、必ずと言っていいくらい小さな死体が寄り添うようにして転がっていました。

戦争は人が生きていくことが許されないのです。そして、死んでも、それがまるでごみくずのように扱われます。人の命なんていうのは、本当に粗末に扱われます。だから、どんな理由があっても、いつの時代も、どこの国でも、私は戦争だけはやってはいけない、つくづくそう思います。あの戦争は68年前の話ですが、日本の歴史です。私たちは日本の過去をしっかりと勉強して、再び日本が過ちをくり返すことがないように平和を構築していきたいと思えます。

平和講演会・すいとんの会（平成25年3月10日）

掲載内容は講演当時のものです。



ほんま ゆりこ
本間 百合子さん | 西早稲田一丁目在住
終戦時：1歳

私は新宿区の平和の語り部をしています。語り部と申しましても登録をしたすぐあとに新型コロナウイルス感染症が流行し、お話しする機会が失われておりました。今日は、初めてこのように大勢の皆様の前で、お話をさせていただきます。私の母は生前、語り部活動をしていました。私も語り部になろうと思ったのは、ある日、とある親子との道端での出会いからでした。小学校の低学年くらいでしょうか？男の子が「おばちゃん、そのおてて、どうしたの？」と、私をじっと見つめて、目を離さないのです。私は「お母さんの言うことを聞かなかったからこうなっちゃったのよ」と今まではそう言って、やり過ごしていましたが、その子の、あまりにきれいな、まっすぐな目を見た時に、真実を語らないといけないと決意しました。私の体験が平和のために役立つことを祈りつつ、お話しさせていただきます。

私は浅草で生まれました。近くには墨田川があり、下町人情の厚いところ。そうしたところが一変したのは、昭和20年3月10日の東京大空襲です。その時、私は0歳でした。

夜、突然電気が消え、最初はとにかく身を守るよう、動かないでください、とのことでした。そのうち、けたたましく警報が鳴りひびき、「ただ

ちに安全なところに逃げてください」と言われました。母はとっさに私を背負い、防空頭巾、哺乳ビン、おむつを持ち、下町中を逃げることになりました。子どものいる人は上野の山に行くよう、指示されました。現在の^{うえの}上野動物園です。

山のふもとまで^{たど}辿り着き、防空壕の一番奥に入れさせられました。しかし、入ったのはいいが、私が今まで聞いたことのないような妙な声で泣き出したそうです。母と私は、ぎゅうぎゅう詰めの中を外に出て、あてもなく歩き、松屋デパート方面に逃げました。そのうちに、低空飛行で^{ばくげき}爆撃機B29が連隊で押し寄せて来ました。そして、1機が私たちがさっきまでいた防空壕に^{しょういだん}焼夷弾を落としましたのです。

街中にも爆弾を落とし始め、特に群衆めがけ、容赦なく落とし、人々の悲鳴、^{ぐれん}紅蓮の炎の中、倒れている人等々、それはこの世とは思えない地獄のようでした。

その中で、母と子の悲惨な姿を見ました。お母さんの背中には^{しょういだん}焼夷弾が刺さっていて、火が付いていた子どもをとっさに防火用水に入れたまま、動かなくなっていました。自分たちも夢中で逃げている最中で、どうすることもできませんでした。

とうとう逃げている最中、私たちのすぐ左後ろに^{しょういだん}焼夷弾が落下、同時に炎上。その火が背負われていた私のねんねこぼんてんの袖口に付き、あっという間に炎につつまれてしまいました。逃げている人たちから「お母さん、背中の赤ちゃんが燃えてますよー」と言われ、皆で消してくれました。B29の爆音で、母には私の泣き声すら聞こえなかったのです。私は真っ黒に焼けてしまい、左手の指5本全てが焼け落ち、顔面の皮膚は全てはがれ落ちました。母も左顔半分を負傷しました。

私は重症を負い、3日間仮死状態でした。軍の

大型トラックが来て負傷者を集め、護国寺^{ごこくじ}にあった帝大分院（のちの東大附属病院）へ運ばれました。ほとんどの人が重症者です。負傷者でほぼ満員でしたが、その中で4～5歳ぐらいの男の子に母の目が留まったそうです。その子は両腕のひじから下がありませんでした。いつまでも心が痛みました。

あの広い墨田川^{すみだがわ}が遺体で埋まっていました。中には長い棒で一人一人の遺体を探している人もいました。

下町一帯が焼け野原になり、まだところどころ火煙などくすぶっていました。明け方、私を背負い、一人^{ぼうぜん}呆然と焼け野原にたたずみ、終わったんだと思うだけで、母は意欲、気力もなくなっていました。死を選ばなかったのは大ケガをしても生きている背中の子どもの重さ。我に返り、生きていく決意をしました。

私は、小学生の時いじめられたこともありました。そうした中で母がいつも言っていたことは、いじめられても、やり返しては絶対にダメと、き

びしく言われました。くやしかったらその子の上に行きなさい。いじめた子が70点だったらあなたは80点取れば上になったことになるでしょ、そう育てられました。おかげで恨んだりしたことは一度もありませんでした。

これが、私の体験です。

最後になりますが、いのちには限りがあります。あと何年生きるかはわかりませんが、心の持ち方次第ではまだ頑張れるかなと思っています。終戦から77年、私は最後の体験世代になります。戦争ほど残酷で悲惨なものはありません。私たちは一家離散して全てを失いました。同じ過ちを繰り返さないよう、平和な日本を若い人たちにも、しっかり受け継いでいてほしいと、切に思います。

ピーストーク新宿（令和4年12月4日）

掲載内容は講演当時のものです。

姉妹二人^{こうしゅれい}公主嶺からの引き揚げ

引揚者の体験



つちや ひろこ
土屋 洸子さん

西東京市下保谷在住
終戦時：12歳

私の父は東京生まれですが、北海道大学（当時は帝国大学）の農学部で土や肥料を専門に研究していました。当時、^{まんしゅう}満州には農事試験場ができておりました。^{まんしゅう}満州は大変寒いところで、^{まんしゅう}寒い満州の産業・農業・鉱業を研究するために、北海道大学の出身者が現地に送り込まれました。父はその一人だったので、私が3歳の時に、当時住んでいた鳥取から^{まんしゅうこく}満州国の^{こうしゅれい}公主嶺に移りました。「公主」とは中国の清の時代の皇帝のお嬢さんのことで、清の第6代皇帝のお嬢さんがモンゴルのさる豪族にお嫁に行く途中で病気になり、この地で亡くなったという伝説からこの地名がついたようです。

日露戦争前まで、^{まんしゅう}満州はロシアの支配下に置かれていました。日露戦争（明治37年～38年）の結果、ロシアが整備した鉄道を日本が引き継ぎ、^{みなみまんしゅう}南満州鉄道株式会社を設立しました。^{こうしゅれい}公主嶺の中央には^{まんしゅう}満州鉄道が走っており、ヘビが獲物をのみ込んだように、駅の周辺に「附属地」というまちがありました。この附属地には現地の人は住めず、私を含め日本人のみが生活していました。附属地にある小学校を卒業した後、私は^{こうしゅれい}公主嶺の北にある^{しんきょう}新京のまちの^{しきしま}敷島高等女学校に進学し、校舎の隣にある寄宿舎に入りました。

昭和20年8月9日の午前0時に^{しんきょう}新京に爆弾が落

ちます。後でわかったのですが、この日はソ連が参戦した日であり、ソ連による空襲でした。ソ連が攻めて来るから親元に帰した方がいいということになり、8月11日に^{こうしゅれい}公主嶺に帰ることになりました。

^{しんきょう}新京から^{こうしゅれい}南の公主嶺に向かって汽車で帰るのですが、汽車の行き先が秘密にされていてわからないのです。^{こうしゅれい}公主嶺出身の2年上の先輩、同級生、私の3名で汽車に乗ったのですが、太陽を見て南に走っていることがわかり「あ～よかったね」なんて言っていました。しかし、^{しんきょう}新京と^{こうしゅれい}公主嶺の間には6、7駅あり、いつもなら全部の駅に停車してくれるのですが、この時は停車しないで全速力で走り抜けていくのです。^{こうしゅれい}公主嶺の駅に近くなった時に少し速度が弱くなったので、先輩が「とにかく飛び降りましょう」と。走っている汽車ですよ。そこからホームに飛び降り、転がりました。よく怪我をしなかったと思います。

これが8月11日、この日を私は忘れたいのです。こんな日を憶えていてはかなわない。自分の誕生日ならいざ知らず、70年前のこんな日を、カレンダーを見ると思い出すのです。消しゴムがあったら消したいくらい。でも忘れ難い。昭和20年の8月9日がソ連参戦、私が飛び降りたのが8月11日です。

8月15日、^{こうしゅれい}公主嶺から^{そかい}疎開する最後の汽車に乗ることになりました。父は列車長として、青酸カリが450g入っている2本のビンとスコップ2本を受け取りました。列車には大体2,000人ぐらい乗るのですが、いざという時に“その青酸カリを2,000人分に分けて、死体をスコップで埋めろ”という命令を受けていました。汽車に乗りじっと待っていたのですが、汽車は出発しませんでした。どうやら日本は負けたらしいという噂が流れましたが、ラジオなんか手元にないからわからなかつ

たのです。誰かがそんなことを聞きつけたのでしょうか。とにかく汽車は出発せず、私たちは家に帰りました。

その後、23日にソ連軍が^{こうしゅれい}公主嶺に入ってきました。24日になるとソ連軍がダツダツと何百人と行進してきます。私たちは着のみ着のまま逃げました。リュックサックを持っていると引きずり出される、装身具や時計もソ連兵に「ダワイダワイ」と言って取られるので持てない。今でも私は長いネックレスができないんです。思い出してしまうんです。

私は鉄道の南側の避難所に逃げました。当時、「根こそぎ動員」といって20～40歳代の男の人はほとんど出征しており、中学1・2年生や私の父のような病人だとかが残っている程度でした。避難所にはソ連兵が「マダム、ダワイ」とやって来るわけですから、玄関に全部板を張って、中学1・2年生の男の子が見張り番をやってくれました。私たちは部屋の中にいて、ソ連兵が来ると見張り番が玄関からヒモを引っ張って、部屋の中にある小石を入れた空き缶を引っ張ってカランカランと鳴らします。そこで天井に逃げるわけです。また、女性はみんな丸坊主にしました。9月2日だったのでしょうか、母が泣きながら私の頭の毛を丸坊主にしました。あのカランカランという音は今でも似たような音を聞くと思い出してしまいます。そんなことが秋頃まで続きます。



関連地図

昭和21年3月、ソ連軍がいなくなると今度は蒋介石が率いる国府軍と毛沢東が率いる共産党軍による国共内戦が始まります。当時、私の家族6人と石川さんの家族5人は六畳二間の家で、それぞれ一間ずつ使っていました。忘れもしない、4月22日に共産党軍の兵士10人を泊める割り当てが来ました。私の家族が住んでいた一間を共産党軍の兵士10人に提供し、石川さんの家族の一間に2家族が寄りました。2家族で1歳から7歳ぐらいまでの子どもが5人いたものですから、「静かにしなさい」と親が注意しても5分もつかどうか。兵士は朝になると戦争に出掛け、夜になると戻ってきます。鉄砲も弾を詰めたままです。戦争に来た兵士は遊びに来たわけではない、どんなことが起こるか分からない。兵士は3泊しましたが、当時の親の気持ちはどんなものだったかと今は思います。

7月17日に父が私に「学校があるから、妹と札幌^{さっぽろ}のおじいさんの家に帰りなさい」と言いました。父は、暴動と略奪で滅茶苦茶になった農事試験場の再建計画を立てるための技術者となったため帰国ができなくなりました。家族全員に残留の命令が出ていましたが治安が悪くなることを考え、父は13歳の私と7歳の妹を帰国させる決心をしました。

7月21日に私は^{こうしゅれい}公主嶺から引き揚げました。21日・22日の2日間で^{こうしゅれい}公主嶺から5,000人の日本人が引き揚げたことになります。^{こうしゅれい}公主嶺から貨物列車に乗り、^{きんしゅう}錦州に着きました。そこで四方を鉄条網に囲まれた壁のないトタン屋根だけの収容所に入りました。ここで伝染病の潜伏期間を過ぎるまで、つまり病人がでるかどうかが確認するため1週間から2週間留め置かれました。その後、^{きんしゅう}錦州から汽車に乗り^{こうとう}葫蘆島に行き、船に乗りました。私と妹が北海道の札幌に着いたのは、8月30日でした。^{こうしゅれい}公主嶺を出てから40日かかりました。両親と下の妹2人は、昭和22年11月に私たちと同じく40日かけて^{さっぽろ}札幌に引き揚げてきました。私の家族は幸いにも一人も欠けることなく命を

持って帰りましたが、たくさんの人々が守ってく
ださったおかげだと思います。

戦争はさまざまな形で人々に関わるものです。
空襲・原爆・地上戦だけでなく、私のように、消
せるなら消し去りたいと思う記憶を残します。

今日は、自分の国だけでなく、日本人以外の民

族・国の戦争に巻き込まれた私の体験を聴いてい
ただきありがとうございました。

すいとんの会（平成28年2月28日）

掲載内容は講演当時のものです。



ざんりゅうこじ 残留孤児としての経験

引揚者の体験



ざる た かつひさ
猿田 勝久さん | 横浜市鶴見区在住
終戦時：1歳

私は、1943年10月、現在の^{かわさき しゅうい}川崎市幸区に生ま
れ、中国で育ち、40代で日本に戻り、今年で72
歳になりました。敗戦の直前、国から呼びかけも
あって、^{まんしゅう}満州へ行けば安定した暮らしができる
という数家族の集団で新潟港から^{まんしゅう}満州へ向かいました。
第二次世界大戦敗戦の1か月前のことでした。
新潟港から出た船は3隻でしたが、うち2隻は沈
没しました。幸い私の両親と祖母はやっとの思い
で中国大陸に上陸することができました。そのあ
とチチハル市に到着しました。現地の若者に荷物
を奪われ、私たちは裸同然になってしまいました
ので、目的地につきませんでした。かろうじて、

李さんという人の台所の裏にあるオンドルを提供
されただけでした。全てゼロからの出発でした。
1945年10月に妹が誕生し、生活はますます苦し
くなりました。

翌年2月から5月にかけて腸チフスに感染し、
祖母と父が相次いで亡くなりました。そのあと大
家さんの紹介で、母は中国人の王さんと再婚しま
した。王さんは私の養父になり、自分の子どもの
ように育ててくれました。母は家族の服も布団も
靴もすべて手で縫って作りました。母は我々が日
本人であること、日本にいる親戚のことなどを話
してくれました。優しい母でした。1949年に妹
が食中毒で死亡しました。続いて1952年に母が
結核で死亡しました。享年38歳、私はまだ8歳で
した。養父に男の子がおり、義理の兄となります。
養父や義兄は私の面倒をよく見てくれましたが、
孤児となった私は日本に帰りたと思うようにな
りました。当時中国では義務教育はないので、学
費はすべて養父が払ってくれました。学校時代い
じめられて、しょっちゅうチビ日本人と呼ばれ、
獣医専門学校を卒業と同時に動物病院に就職。し
かし1966年の文化大革命で日本人であるからと、
職場から追われました。養父が1975年に胃潰瘍

で亡くなりました。享年65歳でした。1981年に私は中国残留婦人の方に依頼し、日本語で手紙を書いてもらって、長野県長岳寺の山本住職（残留孤児の会会長）に送りました。山本さんは厚生省に連絡して下さり、厚生省はチラシを作って配ってくれました。幸い、埼玉県春日部市に住んでいた母の妹がそれを見て、連絡が取れました。1981年秋、私は長男を連れて一時帰国し、36年ぶりに親戚とも会えました。母の弟が私の身元保証人になってくれて、帰国しようとした矢先、また大きな障害が立ちはだかりました。妻が猛反対をしたのです。それでも3年以上かけて妻を納得させ1985年、私は妻と4人の子どもを連れて日本へ帰国しました。しかし敗戦後、私の戸籍は除籍されましたので、時間をかけて日本の戸籍にも

どりしました。63歳で電気会社を定年退職、帰国から30年経ち、日本の生活にもだいぶ慣れてきました。私の体験から言えるのは、戦争は多くの人の命を奪い運命を狂わせるといことです。財産を失うばかりでなく、心もずたずたにします。誰もが私が被ったような不幸な体験をしないよう、二度と戦争のない平和な世界を築いてほしい、私は心から戦争反対と叫びたいと思います。また、養父をはじめ親切に接してくれた多くの人々に感謝したいと思います。

すいとんの会（令和元年12月7日）

掲載内容は講演当時のものです。

語らずして死ねるか 酷寒のシベリア抑留3年の体験談

シベリア抑留



にしくら まさる
西倉 勝さん

相模原市南区在住
終戦時：20歳

これからお話しするのは私の3年間のシベリアでの苦労話です。忘れることはできません。皆さんの可愛い孫や子どもに同じ思いをさせてはいけない、戦争は二度と起こしてはならないという思いでお話します。

私は新潟県の柏崎で生まれました。元内閣総理大臣の田中角栄氏と同郷で、角栄氏は小学校の先輩です。会合にもよく来てくれていました。自民党幹事長時代には「新幹線を作るから東京と新潟が日帰りできるようになる。しっかり親孝行をするんだぞ」と発破をかけてもらいました。ついこの前のことのように思います。

私は、昭和20年1月、19歳の時に入隊しました。軍隊では最初は新発田に配属され、その後、昭和20年2月に朝鮮の会寧に転入させられました。会寧に行ってみると、そこには先輩の部隊がいないのです。どこに行ったかと聞くとフィリピン、南方戦線に行っているとのこと。私を含め、新兵ばかりが集まり訓練を受けました。その後、ソ連との戦いに備え、山の中に入り陣地構築と言って、「タコ壺」という兵士が隠れる穴を掘る作業をしました。8月になると山を下りてこいということです。ウラジオストックに敵前上陸するからだというデマが流れたりしました。山を下りると、日本が

敗戦したことを知り愕然としました。武装解除するから満州と朝鮮の境にある図門まで来いと伝令があり、これからどうなるかわからないと手りゅう弾を胸に入れて歩きました。道中では道路の両側に死体がゴロゴロ転がっています。ウクライナの戦争と同じ、民間人が裸で死んでいるのです。日本の戦車はおもちゃのようなもの、ソ連の戦車は5倍も大きい。そのような情景を目の当たりにしました。これじゃ勝てるはずがないと思いました。

図門で武装解除し、1日歩かされて延吉の仮収容所に行き、ここに20日程いました。その後、そこから移動するから、ソ連兵に200キロ(50里)を歩けない者は申し出ると言われました。残った者はどうなるかわかっています。みんな10日間必死で歩き、着いたのがソ連の領土のポシェットです。ここから貨車に乗せられ、帰国のために南に行くと思っていたら北上して行き、連れて行かれたのがコムソモリスクにあるラーゲリでした。北緯52度、零下20度~30度にもなる場所です。ここで3年間の生活を送るのです。



戦時中は「贅沢は敵なり」が合言葉でした。「欲しがりません勝つまでは」「1億1心火の玉となって」、これらの教育がされていました。昭和19年、兵隊が足りないので20歳からの徴兵が19歳からに繰り上がったことにより、当時19歳の私にも昭和20年1月に召集令状が来ました。



家族写真

子ども時代の写真

私は子どもの時、母の母乳が出なかったため、お米のとぎ汁で育てられました。それで現在98歳です。母親に感謝しています。私の父は明治35年生まれ、母は明治38年生まれ、母の弟は支那事変で戦死しています。そのため、私が軍に入る時に母は「勝、行かないで」と心の中で泣いていたようです。祖母は明治11年生まれ、妹は昭和5年生まれ。曾祖父は安政6年生まれです。曾祖父は私が日本へ帰って来た4年後、94歳で亡くなりました。



私は田舎にいました
が農業をやる気がなくて東京に出たいと思っていました。すると、学校に東京の日立航空機から求人が来て応募しました。当時、中学校は6年間でしたが3

か月繰り上げて、大学・専門学校は6か月繰り上げて卒業させられていました。そのため、私は昭和17年12月に中学校を卒業し、昭和18年1月に日立航空機に勤めることになりました。今でいう東大和市ひがしやまとしにあり、エンジンを作る会社です。私は人事係に配属になり、ここで昭和20年1月に軍隊に行くまでの2年間、事務を行っていました。男は軍隊に行かねば、いつ召集令状しょうしゅうれいじょうが来るのかなんて周囲の人と話していました。

昭和19年11月、アメリカのB29が立川たちかわの方から飛んできました。今でも覚えています。男性は

交代で防空監視を行っています。いよいよ日本が危ない、日本の高射砲こうしゃほうでは1万2,000m上空を飛ぶB29には届かないのです。やがて武蔵野の中島飛行機の工場が爆撃されたのです。そのうちに我が日立にも爆撃が来るだろうと思っていました。私は昭和20年1月15日に軍隊に行きましたが、案の定、私がいた日立の工場は、昭和20年2月26日に爆撃を受けました。130名が亡くなっています。私の知り合いも亡くなっています。私も軍に行かず工場に残っていたら爆撃の雨を受けたかもしれません。

昭和20年の歴史・背景

私が入隊した昭和20年の歴史・背景をお話します。私が会寧かいねいにいた2月にアメリカ・イギリス・ソ連の3首脳による「ヤルタ会談」という極秘の会談が開かれました。アメリカはスターリンに対し、間もなくドイツが敗戦するため日本を攻撃することを打診しました。日本とソ連は昭和16年から21年までの5年間は戦争をしない「日ソ中立条約」という不可侵条約を結んでいました。それを破棄して、スターリンは樺太やアリューシャン列島、北海道の三分の一を自国の領土とする要求を出したが、日本の統治はマッカーサーにやらせるということで断られたのです。

昭和20年3月に東京が大空襲を受ける、ソ連が日ソ中立条約を破棄、5月にドイツが無条件降伏、4月から続いた沖縄戦が6月に終わり、7月にポツダム宣言、8月6日に広島へ原爆投下、8月9日に長崎へ原爆投下です。8月8日にソ連が日本に宣戦布告をしました。皆さんのお手元に当時の読売新聞の特集記事をお配りしました。「日本軍捕虜50万人輸送せよ」、スターリンの極秘指令の全文が記載されています。日付を見てください。「1945（昭和20）年8月23日」です。終戦から何日経っていますか、わずか8日です。既にスターリンはヤルタ会談で自分たちの要求が受け入れられなかったため、その時点で日本人捕虜の連行を決め

ていたと言われています。これでは私たちが日本に帰れるはずがないじゃないですか。この指令文の中に私が抑留されたコムソモリスクについても書かれています。「コムソモリスク第199工場の建設に1万5千人を移送」と。我々はそんなことは知らない、日本に帰れると思って歩いて連れていかれたのがシベリアだったのです。

● 陣地構築の絵

これは山で陣地構築、いわゆる「タコ壺^{つぼ}」を掘る様子を描いた絵です。敵の戦車に突撃するために兵士が隠れる穴です。私は穴を掘りきらないうちに山を下り終戦を知りました。



「禿げ山の蝸壺」佐藤清 画

● 武装解除の絵

武装解除をした様子の絵です。命より大事な銃をごみの山のように没収されました。自分たちがどうなるかわかりません。日本人が経験したことの無い体験を私たちはこれからすることになるのです。その後、1日歩かされて延吉^{えんきつ}の仮収容所に入れられます。



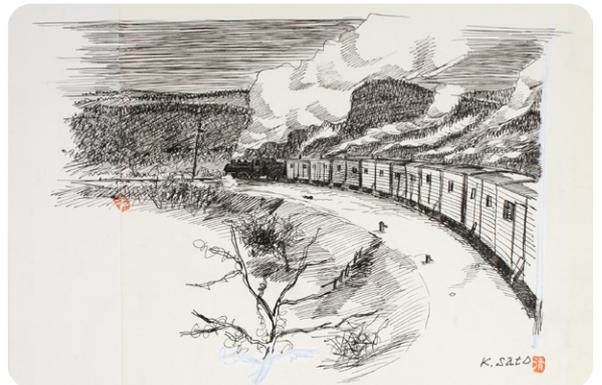
「武装解除」佐藤清 画



「戦いは終って」小澤耕一郎 画

● 貨車の絵

日本に帰すからと言われ、身上調査を受け、私たちは特殊技能を調べられました。その後、我々は貨車に乗せられました。1車両に50人ほど乗せられました。ここではトイレが大変でした。男だから小は何とかなりますが、大きい方は貨車を降りて野草の所で用を足すのです。そんなことを繰り返しながらコムソモリスクに着きました。



「綏芬河を越えて」佐藤清 画

● コムソモリスクの人口と死亡者数

終戦時20万人^{ほど}程の人口のコムソモリスク市内には14カ所のラーゲリがありました。終戦時に9カ所、翌年に5カ所が作られています。私は第4収容所に入れられました。ここで約1万3,500人が収容されましたが、そのうち2,500人が亡くなりました。ラーゲリでの死亡率は平均して全体で1割でしたが、コムソモリスクのラーゲリでは2割弱が亡くなりました。私は市内の工場や農場で水道管の埋設などを行い3年間過ごしましたが、これは運が良かったのです。山で木の伐採や運搬をしている人や、第二シベリア鉄道の建設に従事した人もいました。これらの方々は極めて死亡率が高かった。申し訳ない気持ちがあります。

● ロシアの地図



地図を見てください。ロシアは日本の50倍の土地があります。それでもまだ土地が欲しい、ウクライナが欲しいと言って戦争をしています。私は怒りを持っています。国連がいけないのです。日本がもっと出てきてほしい、戦争をやめさせてほしい。いつも思っています。常任理事国のアメリカ・ロシア・中国・フランス・イギリスの拒否権制度を見直さないと戦争を止めることはできないと思います。そんなことを日々ニュースを見ながら思っています。残念でしょうがない。

● ラーゲリの建物の絵



「収容所内」田中武一郎 画

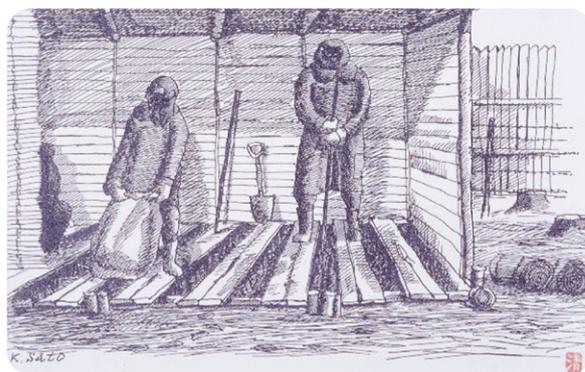
これはラーゲリの絵です。一遍に60万人もの日本人を連れて行ったので受け入れ態勢がありません。バラックがあるところもあればテントで過ごしたところもあったそうです。私のラーゲリでは2段ベッドに何人も入り、一人に毛布1枚だけ渡される。1枚の毛布を下に敷き、2枚の毛布を

上にかけて3人で抱き合って寝ました。ろくな食事ありませんので夏にはやせ細っています。入浴は裸で1列にならんで入ります。シラミが大変なので、着ている物は全て滅菌消毒、体毛は全てそり落としていました。非常に恥ずかしかったです。

● 死亡者の推移

死亡率の統計を取ってみました。抑留された日本人全体が60万人ですが、そのうち6万人が亡くなっています。亡くなった6万人のうちの7割が抑留から1年以内に亡くなっているのです。最も死亡者が多いのが昭和21年1月の死亡数6,861人です。抑留されてすぐに衰弱して死亡する方が多かったのです。私は若かったので「くたばってたまるか」という根性で生きていました。

● トイレの絵



「便所掃除」佐藤清 画

これはラーゲリのトイレの絵です。トイレは兵舎から80mぐらい離れていました。ドアは無い、吹き抜けです。零下20度・30度だと、便が凍ってしまいます。それを鉄棒で砕いて運びました。また、トイレットペーパーなんてありません。ロシア人はトイレットペーパーを使わないのでしょうか。紙もほとんどなく、ふんどの切れ端を使ったりしました。

● 体格検査

「働かざる者食うべからず」と言いますが、若い女医が尻の肉をつまんで働けるかを検査するの

です。この検査で等級を決めて作業区分が決まります。1級は重労働、2級は準重労働、3級は軽作業、4級は室内作業を行います。私は2級でした。規律は厳しく、日本人特有の神経痛・リウマチになる人も多くいましたが、申し出ても聞き入れてもらえませんでした。体温が38度を超えないと休ませてもらえません。また、ノルマの達成率に応じて食料の配給量が決まりました。食事は主に配給される黒パンでした。

● 作業時

道路工事のためにつるはしを振り上げて地面に下ろしますが、土地が凍っているため鉄板のように跳ね返ってくるのです。そのため、^たび火をして氷を溶かしてから掘ろうとするがなかなか掘れない。しかし、仕事が進まないと食事が食べられないのです。私はなにも技術がないので外で働く仕事しかできません。しかし、床屋だった人はあったかい部屋でニコニコしながら兵隊の頭を散髪していました。その姿を見た時に自分も床屋になっていれば良かったと思いました。「芸は身を助く」ということを痛感したのです。

● 分配の絵



帰還者たちの記憶ミュージアム館内ジオラマ

これは黒パンの分配の様子です。食事は人間の本性が出るのです。だから平等に配らなければいけない。パンの角が当たれば味もいいし腹持ちもいい。だからくじ引きをして平等に分けようとしています。酸っぱいんですが、これしか食べる物がないので美味しくてしょうがないんです。

● 点呼の絵

これは作業に行く時の様子です。朝並んで点呼を取って歩きます。一人でもいなくなったら大変です。冬は日が上がるのが遅いので真っ暗な中で作業を始め、日が沈むのも早いので帰りも真っ暗でした。



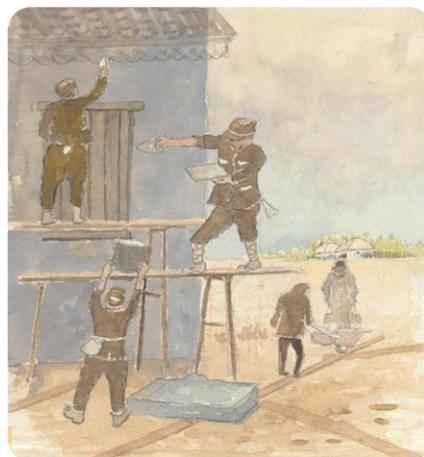
「朝の点呼」 斎藤邦雄 画

● 伐採

伐採は、山から木を切って下ろしてくる。防寒帽をかぶっており、作業中に、「おーい！木が倒れるぞ、危ないぞ！」と叫んでも防寒帽で聞こえないのです。そのため、木の下敷きになり怪我をしたり亡くなる人もいました。

● 建設作業の絵

これは住宅建設の作業の様子です。日本の国土再建と同じですね。ソ連は戦争で2,700万人、国民の2割が亡くなっており、国を再建するために我々を使ったのです。



「左官作業」 早田貫一 画

● 埋葬

亡くなった人は裸にして山に運んで白樺の木
の根っこに埋めました。火葬なんかしなかった。
だから、我々の合言葉は「白樺の肥やしになるま
いぞ」でした。

● 日記帳の写真

紙が無いのです。そのため、セメント袋の空き
袋を解体して紙にしたり、新聞の耳の空白の箇所
を切ってノートにしました。



● 手紙の写真

映画『ラーゲリより愛を込めて』にもありまし
たが、私も手紙を家族あてに書きましたが、最初
は書き方が悪く届きませんでした。当時、ソ連で
洗脳を受けていましたので日本の批判を書いた
ため届かなかったようです。その反省を生かして、
その後は手紙のや
りとりができるよ
うになりました。



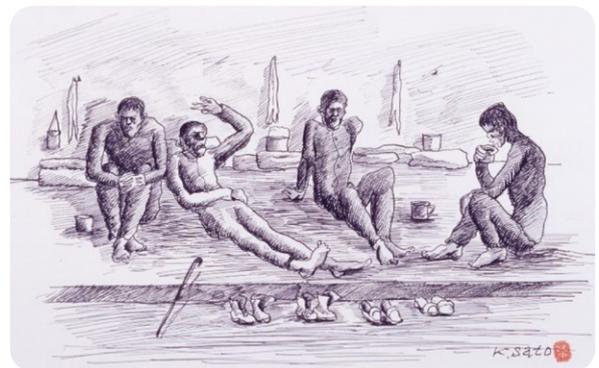
● ばれいしょ 馬鈴薯

これは私の経験ですが、道路の上に**ばれいしょ**
(じゃがいも)が落ちていました。馬車の荷から
落ちたのかと思いポケットに入れて持って帰っ
てから焚き火で焼いて食べようとしたのです。焼
けたかなと確認するとなんと馬の**ふん**だったのです。

今では笑い話です。また、ある日、私は民家に派
遣されて作業をしたことがあったのですが、そこ
の奥さんがじゃがいものバター炒めを作って振る
舞ってくれたのです。これが**おいしい**で忘れられ
ないのです。ソ連でも民間の中にはこのように親
切な方も**たくさん**いたのでしょう。なので民間交流を
続けてほしいと願っています。

● 病院の絵

これは病院の様子です。私は働きすぎて39度の
熱が出て倒れたことがあり、コムソモリスクの893
病院という病院に入れられました。ここで多くの方
が亡くなっているため、仲間からは「西倉は死んだ」
と思われていました。急性の胸膜炎だったのです
が5か月後に退院してラーゲリに戻りました。



「内科病室」佐藤清 画

私の話は以上です。我々の合言葉「国土の土を
踏むまでは、白樺の肥やしになるまいぞ」。戦争
ではこんなことが起きていた。こんな思いをお子
さんやお孫さんにさせないため、戦争は起こして
はいけないと思っています。ありがとうございました。

平和講演会・映画会（令和6年3月10日）

掲載内容は講演当時のものです。

帰還者たちの記憶ミュージアム 協力

奇跡的に助かった命

被爆体験

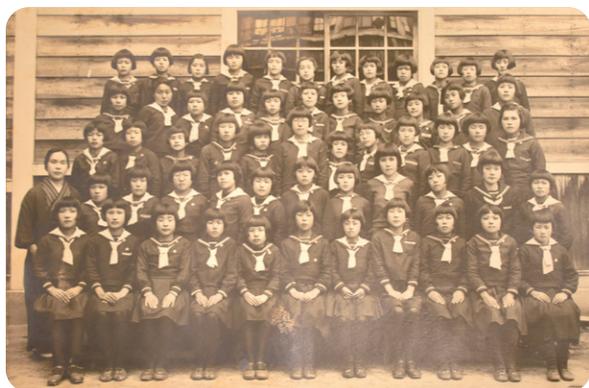


よしほ まさちこ
吉濱 幸子さん | 西落合三丁目在住
終戦時：14歳

私の広島での被爆体験を聞いていただきたいと思います。

私は子どもにも被爆の詳しい話は伝えておりません。ですけれども、今から78年前のあの恐ろしい被爆体験をみなさんにお話しすることが、何かの供養になるのではと思い、この場に立たせていただきました。

昭和20年8月6日、私が旧制の高等女学校の3年生、14歳の時の話です。私は天満町（現：広島市）の三宅製針という軍需工場に学徒動員として奉仕していました。お手元の地図にあると思いますが、天満町は爆心地から1.2kmと非常に近いところです。



学徒動員に出る時の女学校一年生のクラス全員の写真

当日の朝、空を飛ぶB29の銀色の機体から、ブ

ルンブルンと不気味な音が聞こえていましたが、空襲警報も警戒警報も解除され、それぞれの持ち場について作業を始めた時のことでした。私は掘りかけの防空壕の穴のなかで4~5人の友人と作業していたのですが、急に周囲がピカーッと光ったと思ったら辺りが黄色に包まれ、すぐにドカーンという轟音がしました。爆風で吹き飛ばされた破片が穴の中に次々に飛んできて、穴の中に伏せている私たちの頭上を埋め尽くしてしまいました。私たちは深さ1.5mの防空壕の穴の中で気絶して

いました。しばらくして穴から這い出してみると、周囲の建物は全て崩れ落ち、いたるところから火が立ち上り、朝なのにひどく薄暗く、「助けて」といううめき声が方々で聞こえます。まるで修羅場のようなでした。私は友人と手を取りながら、己斐（広島市西部）の山の方に逃げる人たちの無言の列に加わって逃げました。何が起こったのかわからずパニック状態でしたが、落ち着きを取り戻して周囲を見渡すと、焼けただれた皮膚がぼろのように腕から垂れ下がり幽霊のように腕を上げている人や、全裸で皮膚がテカテカに焼きただれたお母さんが赤ちゃんにお乳を含ませていたり、暗雲が立ち込めるゾンビの世界に舞い込んだような錯覚に陥りました。みんな、誰が言いたしたわけでもなく見たとおりの言葉で、「ピカドン」という爆弾が落ちたんだと口々に叫んでいました。また、逃げる途中でねっとりとした黒い雨にあたり、露出した肌にまとわりつき身も心も恐怖でいっぱいでした。

午後になって救援隊のトラックが来ました。友達の家がある「大野（現：廿日市市）」を目指し、そのトラックに乗って日本三景で有名な宮島口まで行きました。大野は宮島の隣の駅なので、そこからは友達と二人でとぼとぼと歩き友達の家に着

きました。私の家は爆心地の東の比治山公園という小高い丘の東側のふもとにありました。とても家に帰れる状態ではなかったので、友達の家に2日ほど泊めてもらいました。その後、友達のお父さんに自転車の後ろに乗せてもらい家まで送ってもらうことになりました。



私の親友でもあり命の恩人の友人と
(左:本人 右:友人)

広島市内の入り口の己斐まではどうにか行けたのですが、そこから市内に入るのが大変でした。広島は市内に6本の川（当時は7本）が流れ、その川の三角デルタの上に発展した美しい街です。そのため、川を渡らないと家に帰れないため川に架かった鉄橋を渡る必要があります。鉄橋の枕木は全部焼け落ちていたので、残っていた鉄の部分だけをつかんでどうにか渡り切りました。渡っている途中で下を覗いてみると、水を求めて入水し溺れた人の屍がいかだのように流れていました。水に亡くなった女の人の黒髪がなびいて、川面が見えないほどの、「死の川」となっていました。

また、市内の道は、歩けないほどに焼け焦げた死体でいっぱいでした。まるで人の死体と思えないほど惨めな様でした。当時、空襲で建物が延焼しないように建物疎開（あらかじめ建物を壊しておくこと）が行われており、壊した建物の後片づけを女学生や中学生の低学年、それから隣組の人や在郷軍人などが勤労奉仕の作業として行っていた

ました。これらの作業を行っていた人たちは、遮蔽物が無いまち中で即死状態で焼き尽くされたのだと思います。焼け野原では、いたるところで人・木・人・木と交互に積み上げた死体に重油をかけて燃やす処理をしていました。なんとも言えない死臭が漂い、足元は炭化した遺体で埋め尽くされていました。熱風と死臭の中を彷徨い、本当に地獄より怖い悪魔の世界にいるようで生きた心地がしませんでした。

なんとか我が家に辿り着き、両親・姉と対面しました。ですが、当時小学校2年生だった私の弟は、外で遊んでいた時に「直爆（直接被爆）」で死亡し、小さい骨壺に入っていました。私はこの時ほど命の儚さを感じたことはありませんでした。これを機に奇跡的に助かった命で何かお役に立てる仕事をしたいと決心して、薬剤師の道を選びました。



かつて開業していた自宅兼店舗の「ときわ薬局」

また、私の親戚や多くの広島で被爆した人の中には、皮膚の表面に黒い斑点が出る所謂「原爆症」にかかり、一週間ぐらいで亡くなった人がたくさんいました。当時は火葬場も無いしお医者さんもないため、家族でお骨にするしかなく、遺体は家族で火葬しました。ですが、どうしても頭部が焼けなくて、家の仏壇に置いていたら、すすけた黒い顔面から白いウジが出たり入ったりしていました。身の凍える思いで、翌日再び火葬してお骨

にしたこともありました。

経験したことのない数々の修羅場に遭遇し、怖くて夜もおちおち眠れない日が続きました。私は5年制の女学校を卒業し、進学のために昭和23年に上京してきましたが、当時の東京駅はすすだらけで駅前は何一つない焼け野原でした。こんなところで生活できるのかと不安でしたが、親戚の家のある西落合にしおちあいは東京大空襲を免れ焼け残っていて、現在もこの家に住み続けています。



薬局で研修の頃。
友人と共に

学校が焼失して半年後、瀬戸内海せとないかいに面した呉線くれの安浦やすうらにある旧軍隊の兵舎で授業が始まり、4年生の時は寮生活、5年生の時は自宅から通学しました。片道2時間かかるので、朝6時の汽車に乗らないといけません。朝5時に起きて暗い道を広島駅まで歩いていくのが危ないので、毎朝父が駅まで送ってくれました。

当時は蒸気機関車で、トンネルに入るたびに窓枠から黒いすすが入ってきていました。また、ある時は節電でトンネルに入っても電気がつかず真っ暗

な中で殺人事件があったりと怖いこともありました。

戦後の何もない時代でしたが、「ほしがりません 勝つまでは」の標語のとおり、国民が一致団結して戦前・戦後の貧しい時代を頑張ってきたおかげで現在の平和があるのだと痛感しています。顧みると、戦争ほど愚かで惨めなものはありません。ロシアのウクライナへの侵攻や、イスラエルのガザ地区での戦いを思うと、一日も早く停戦し世界中の人々が平和に暮らせることを祈るばかりです。悪魔の戦いは二度とあってはならないので核実験や核兵器の廃絶を叫び続けなければなりません。8月6日は、平和記念公園の傍の元安川へいわ きねんこうえん そばでとうろう流しを毎年やっています。故人の冥福を祈り色々な思いを託し、ゆらゆらと揺らめき川を流れる様は心癒やされる一瞬です。



家族写真

すいとんの会（令和5年12月3日）

掲載内容は講演当時のものです。



瀬木 正孝さん
(広島被爆者援護会) | 広島市西区在住
終戦時：10歳

祖母の家を抜け出して

被爆当時は満10歳で、小学校5年生でした。被爆で心に焼き付いたこと、2点を中心に話させていただきます。

私は、学童疎開^{がくどう そかい}といって、広島から約70キロメートル余り北へ入った祖母の家に、3歳の妹、小学校2年生の弟、そして小学校5年生になったばかりの私と三人で、1945（昭和20）年の4月から避難していたんです。3か月も経つうちにだんだん両親に会いたいという想いが強くなって、被爆した8月6日の前日、弟と二人で広島行きの蒸気機関車に祖母に見つからないよう乗り込んで、爆心地^{ばくしんち}から南西に約1.5キロメートルのところの自宅に帰りました。

光、音、そして吹き飛ばされて

あくる日の8月6日午前7時、警戒警報^{けいかいけいほう}のサイレンが鳴りました。起きると、父がもう警察官の制服を着て出ていくところで、「今日、田舎へ帰れよ。お祖母ちゃんに黙って帰ったらだめだぞ。」と言いながら家を出ていきました。その後ろ姿がこの世で父を見た最後になったわけです。

私の家の中庭には池があり、そのほとりに立って腰をかがみかけたその時に、目の前を真っ白な

光が走りました。口では言い表せないような強烈な光。その光と同時に地鳴りがあり、まるで頭の上から大きなドラム缶を叩きつけられたような強烈な音がし、バーンと体が持ち上げられるような音でした。その余韻が63年間一度も消えたことがありません。両方の耳が今でもワンワンと鳴っています。光。音。次に気が付いたら、池を飛び越えて約10メートル余り離れている風呂場のレンガの壁に叩きつけられて、上から物が落ちてくるので気が付いたんです。あたりが真っ暗。左足を動かそうとしたら別の所にいた弟が飛ばされてきていて泣いていました。頭に手をやってみると、血が流れていました。お母さんは真正面^{まっせん}から熱線を浴びて、血だらけになって、皮膚がつるつとむけていました。中学校1年生の兄は、爆風^{ばくふう}で完全につぶされた家の柱と柱の間から真っ黒な顔をして「お母ちゃん、痛いようー。」と言いながら這い出てきました。その兄は、窓際へ背中を向けて寝ていたため、肩から下の身体の裏側にガラスが無数に刺さっていました。被爆から20年経ったくらいまでは、年に2つとか3つとか背中からガラスが出ていました。

お母さんってすごいなー

心に焼き付いたことの1つ目ですが、あれほど大火傷^{おおやけど}をしていたお母さんが、姿が見えない妹を探しに、柱の隙間^{すきま}へスルッとめぐり込んだんです。お母さんってすごいなーとその時思いました。つぶれた家の下の方から白い煙が上り始めましたが、お母さんの動きは速く、わずかな時間で、病後で力なく泣いている妹を夏布団にくるんで出てきました。その時お母さんは、皮膚が取れかかり、ぶら下がっていた皮膚もちぎれ、そこから血が噴き出ていました。また、足の方も大火傷^{おおやけど}をしていましたが、母が「さあ、逃げよう。」と言って、一

緒に避難しました。避難場所では板塀が炎を上げていたので、更に南へ400メートル近く行った広い畑の中へ倒れ、座り込みました。真っ赤に染まった広島の空を見ながら、燃えている音が強烈なので、被災者のほとんどがその晩よく眠れませんでした。

親父おらんなー

8月7日朝、私たちは、救護所になっていた江波国民学校へ行き、教室の隅へ夏布団を広げてお母さん、妹、兄と寝かせて赤チンを塗ってもらいました。お母さんが「お前は元気そうじゃけ、家の方へ行ってお父ちゃんを捜してくれ。」と言うので、私一人で焼け跡に出た時にびっくりしました。黒ずんだビルが所々立っているだけで、何処へ立っても広島中が見渡せたのです。自分の家をようやく見つけ、板切れに燃え差しで「お父ちゃん、江波国民学校へおる。」と書いて、色んな所を捜し歩きました。

8月8日朝、お母さんが「今日は、お父さんが勤めていた県警本部のある県庁の方へ行ってみたい。」と言うので捜しに出ました。鉄筋の県庁も完全に破壊され、県庁の南にあった日赤病院でも「親父おらんなー。」と思って、病院の正面玄関へ出ました。ここで2つ目の心に焼き付いたことに出会いました。玄関前の築山の周りに真っ黒に腫れ上がった死体を放射状に並べ、5段、6段と重ねてあったのですが、一回りしかけた時に、長くて痩せ細り、燦けた手の先が力なく何かをつかもうとするように動いていました。それを見た時にびっくりしました。頭の上から氷水をぶちかけられたようにぞっとして、次の瞬間、泣きながら300メートルほど走って逃げました。その後、時々その黒い腕に追っかけられる夢を見るようになり

ました。はっと気が付くと冬でも汗びっしょりで、それがずっと続いていました。1989（平成元）年11月に、ある団体から「体験話してくれんや。あんたらが話せんかったら原爆の被害が風化して忘れられてしまう。」と言われて一度話をしたら、不思議と黒い腕に追っかけられる夢は見なくなりました。

生かされているからこそ

母親は、12月初めには火傷の方は相当良くなって、1946（昭和21）年2月に弟が五体満足で生まれてきました。翌3月に、父親の遺骨が県庁から送られてきて、中には焼けた砂と親指大の白い骨が1個入っているだけでした。妹は、3月くらいから髪の毛が抜け、鼻血が止まらないようになり、歯茎から出血、丸2年経った1947（昭和22）年8月に学校に1回も行くことなく亡くなりました。私は、被爆後50年目、1995（平成7）年に小さいガンがあると言われ、胃は全部取られました。一緒に逃げ帰った弟は肺ガンが見つかって、1997（平成9）年11月に亡くなったんです。生き残った被害者が僅かに浴びた放射線、これが大きな違いになるということです。

私が平和の基本だと思っているのは、一人ひとりが思いやりの心を持って、そして優しい心持ちで人間の命、生き物の命の大切さを、是非胸に収めておいていただくことです。そうすれば差別したり、人をいじめたりすることは必ずなくなっていくと思います。これを一人ひとりが実践し、やがてそれが大きくなって、戦争のない、争いのない地球を構築してくれると信じ、話をさせてもらいました。

平和講演・映画会（平成21年3月7日）

掲載内容は講演当時のものです。



いしはら ちえこ
石原 智子さん | 広島市安佐南区在住
(広島被爆者援護会) | 終戦時：0歳

私は、皆さんの前で偉そうに、広島^の被爆者ですと言える力が無いのです。というのは、私は(原爆投下の)翌年5月に生まれた胎内^{たいたい}被爆者です。ただ、私にもできることがあるんじゃないかと思ったのが父の話だったんです。

父が、孫である私の二人の娘に対して一生懸命ゲートルの話をした時に、それを聞いた娘たちは「ハイソックスを買ってもらったお金がなかったの?」と聞いたんです。そして、鉄かぶとの話を父はわかりやすく絵に描いて教えました。すると、「フルフェイスのヘルメットの方が安全でしょ。こんなところを撃たれたらどうするのよ、じいは」って。娘は決して茶化^{ちやか}しているわけではないのです。父は、一生懸命話をしても孫の世代に通じないことを感じ、「お前がリリーフとして、俺の話をまず孫や若い世代に伝えてくれないか。そうしてくれれば自分たちは、たくさん^{たくさん}のことを残していける」と言ったんです。確かに残してくれないと、話さないと、誰にも伝わらない。

私の両親は生きている間は、伝えることがつらいと言っていました。特に母は「助けてほしいと言った人を、誰一人助けられなかった。2歳から3歳の子が、助けて、助けてって言うのを助けられなかったことがとても罪悪感なんだ」と言って

いました。私は二人の子の親として、母の気持ちがわかるようになりました。

当時のことを私は語る事ができません。ただ、私でなければできないことがあるとしたら、全国から平和学習で広島に派遣されて来る子どもたちと同じ立場で、広島のこと、原爆のこと、戦争、それが語れるんじゃないかと思うんです。

私の両親は、アメリカが憎いと思ったかもしれませんが、私たちの前で一度もアメリカを悪く言いませんでした。父は認定被爆者で入院、退院の繰り返しでした。多臓器がんです。がんセンターによく行っていました。もちろん許可を取ったうえですが、治療のために両手両足を縛られるんです。あまりにもつらそうなので、私は「父さん、アメリカってひどいよね」しか言えないのです。そんな時でも、父は「戦争が良くないんだ」と言ってくれた。でも、「原子爆弾ってやり過ぎじゃない」と言うと、「日本も毒ガスを作り、兵器を作り、地上戦に備えて竹槍^{たけやり}訓練をしたんだ」っていつも同じことを言い切るのです。「原子爆弾も人を殺す兵器なら、竹槍^{たけやり}の1本も人間を殺す兵器なんだ」と言った時、私は父にアメリカ人の彼女でもいるんだろうかなんて本気で考えました。だって、そんなこと言う人はいないと思っていたから。しかし、『どっちが悪い』を言っていたら、いつまで経っても平和にはなれない。戦争が終わった時点で考え方を考える人でなきゃいけない」と言っていました。

父は80歳まで生きてくれました。父から、「母さんのために1分でも1秒でも長生きしてくれ。お前にはそれしか頼まない。1回だって忘れないでくれ。最後の被爆者になってほしい」と言われた時、私は、啞然^{あぜん}としました。もっと難しいことを言ってほしいと思った。だって、それはできるでしょう。(原爆投下の)翌年の5月生まれまでを、広島^の被爆者と呼んでいます。私は、5月生まれ

の被爆者なんです。もう少し難しいことを言われれば私は一生懸命努力しますのに。

それから3年して母が同じように多臓器がんで亡くなった時に、父が言ってくれた言葉の重みを知りました。母は大きな声で「私は今日までお前たちがいてくれたから、元気で幸せに生きた」と言ってくれました。私の思う「元気で幸せ」は、入退院をしない人と信じていました。家の用事をしたり、お勤めに行く人を元気だと信じていたのに。母はそうではない。生きて毎朝お日様が拝めること。そのことが健康で一番の幸せだと言ってくれました。

決して、皆さんに自慢できる両親ではありません。ただ、我が子が平和な世の中で少しでも長く生きて、たった一つでもいいから、社会の何か一つに携われる子になってくれればそれでいいと言ってくれた親でもありました。

私は広島で、ピース・ボランティアとして資料館の中のご案内などをさせていただいています。その時に欠かさず言うのは、原爆も東京大空襲なども一緒だということ。逃げ場が無いことの怖さ。防空壕ぼうくうごうに隠れたとしましょう。そこが安全だと言えるものはどこにも無いんです。そして、長崎であり地上戦をやった沖縄も全て一緒です。被爆者が特別ではないと言われて大きくなりました。

私の父が生きている間、戦争に負けて物の無い時、不平も言わず助け合ったからこそ、小さな島国が世界有数の経済大国になった、そのことが日本人の魂だと言って喜んでいました。私は日本人の両親や祖父母を持ったごく普通の人間ですけど、あの当時生まれていた人は皆被害者であり、犠牲者だということを私は両親から聞いて大きくなりました。当時の人が、我慢し、助け合いながら努力してくれたおかげで今の平和がある。じゃあ、この平和を私たちがずっと保っていかなくちゃいけない。そのためには、今日のお話のように風化させないこと。これは第一に大きな平和活動だと思います。

私が子どもたちに頼みたいこと。それは一人ひとりがチャンピオンだということです。一番って一人しかいないと思うんですが、実はそうではないんです。そうであつたら私なんかチャンピオンになれるわけがありません。どの教科もできません。駆けっこも比較的速いからと言っても一番にはなれません。私が「おはようございます」と大きな声で挨拶をするチャンピオンになったと入院している両親に言ったら、「良かったね。大きな声が出せるのは、元気だからだよ」と言ってくれました。「そのチャンピオンに推薦してくれた人は誰？」と聞かれたので、「クラスのこの人」と言ったら、「よく見抜いてくれたね」と言われました。見抜いてくれた優しさに感謝をする子になってほしいと伝えてくれた親の気持ち。元気で優しさをもった人になってくれるんならそれが一番嬉しいってことを言ってくれたこと。人の良い所を探してあげるからこそ、心の優しさ、思いやりを育てるんじゃないだろうかと思うんです。

私はよく平和活動しましょうとか言いますが、何をすればいいんだろうか。小さな団体、まずは家族です。家族であり、お友達であり、クラスであり、地域であり、そういった小さな団体が皆で仲良くすること。戦争がいけないのは当たり前ですが、戦争がないだけが平和じゃないんだよね。皆と仲良くできる日々の暮らし、これが何よりも幸せであり、それこそが平和なんだということを、皆でしっかり見つけてください。

私は自分にできること、こうして身近なところで顔を見ながら「今日、広島から来たんですよ。健康が私の自慢ですよ」と言える小さなこと。こんなことは、父の気持ちのとおり、最後の被爆者になるまで続けていきたいと思います。

平和講演会・すいとんの会（平成25年3月10日）

掲載内容は講演当時のものです。